共古日錄 十九

特別
15
1413
21

門 15
號 1413
卷 21

早稲田大學圖書館
昭25.10.24
購入

共古日録　十九

初年に
の松
苔

共古

武蔵国

一月やさしく初午のしるしとて稲荷の宮の松まえつ葉れ色　光復
稲荷の宮の松の書葉とかきつけ侍りしを　知家

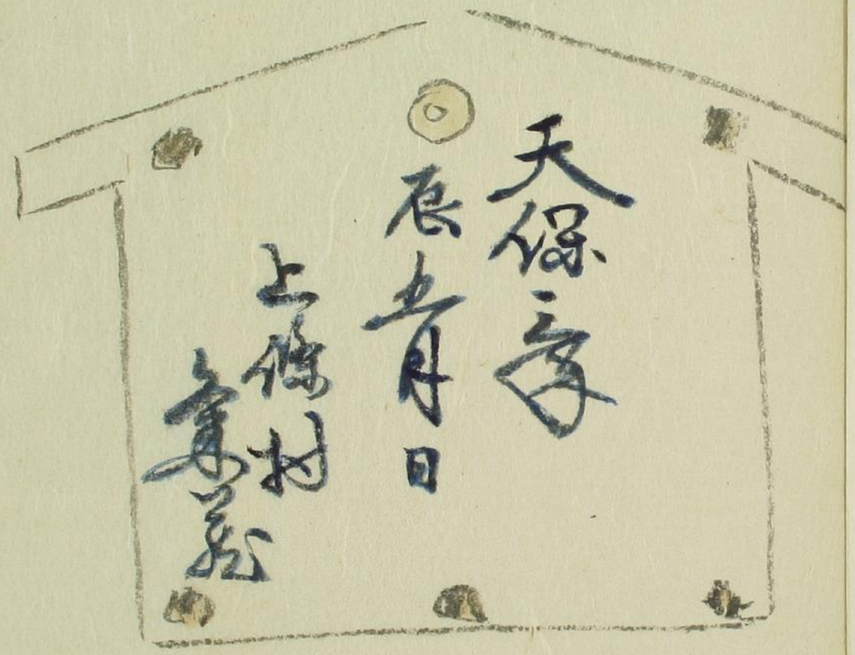
太宰府の宮の前に永久四年後朝形堂に七人の童子ありて大宰
ときき七百九十八年前なり　文安年間
七百年稲荷の山の松の葉
の松の葉のきすきに
松の葉のかるかの
松の葉のかるかの
松の葉のかるかの

[illegible]

紀州熊野の[illegible]の親[illegible]の[illegible]の日[illegible]の[illegible]の[illegible]の

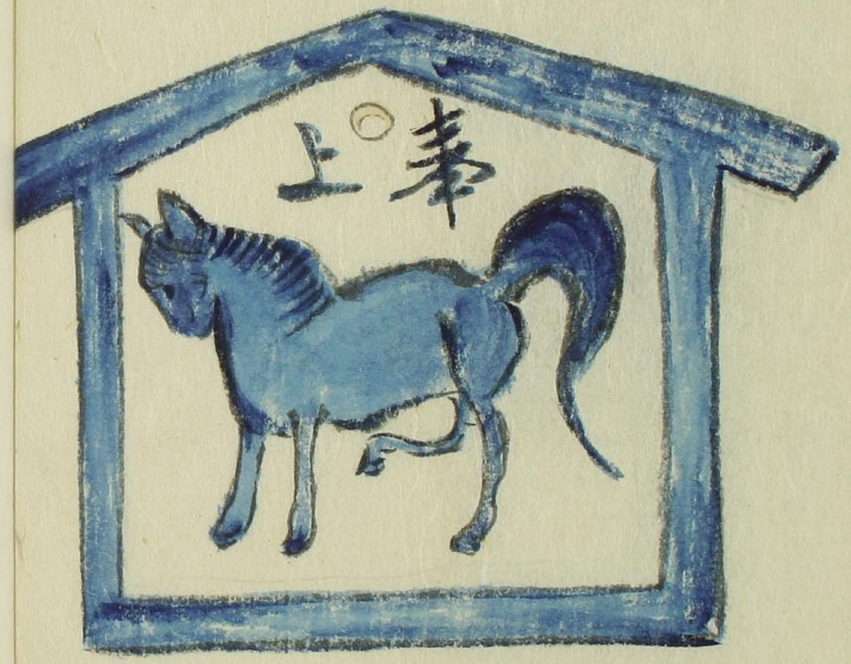
陶製の馬

陶器製
繪馬
大正図



佐渡国多田の古墳
經塚山及妙金山の
傳說

[illegible]



佐渡名勝の哉の俚謡

佐渡俚謡

。後小尾天宮の
佐渡い越後ゆ
ちぢ馬ひ物
物ゆ釣竿
ものの
ゆ
ゆ
ゆ

朝てらめちだ後さは一さめ湯ってもの
何ちら長いさづたた爺さんあくびして鐵かはた何ちらきが何なるとも意さ
新保人の立まつり和かふらねばふかく（毛重上荒多し）（はさ丸丹面の方言）
あ一つの強ちつ山せの元だ山せヤ下りの種にちあいの紫山せい東風下りは南風ちら（多く侵略は風は多し）（ヤいはの音便ちら）
下の方海山腰にあちまつた明日は下あ名であろう（風下安いあいの）
○地理に関しちるものの
い才き間ぐもつ相川さは山で東麦さ魚でもつ（間は巷の方言）（山は鑛山ちら）
顔大野色さ相わけ高だあいと下りの坊わけだ（砂は相名方言色は大佛岩北端の大岬ちら）（甘内丹風面異ちらとら）
矢神押出て外海見れば下気中の子ちくと（下気いあいの風中の子は宣ちく吹く風）
小才さ真下り水津さ出しよ火川面の風間の妻だ（東下りは南風たしは）
水津は芋蔵色だ三拠きめ色めかちっ

外の風色は豆ちっ色冬は西風の忍がちら
海風二十四村ちめが戸地ちら戸中ちら（戸地戸中皆拠の名）
戸中から玉辺ゴジわらしかち色に二ちく（戸中と玉辺の間ちら里一里あり名の初り草）
火色のわしり儀ふしんでわさ
北は拠拠高さ色ちっ色の色でもすに（火色きちっ名称）
工さ大山下は拠拠で煙宣煙ちあ拠だ（南北北下ちら大山さ火山の名称に拠ちら）（火色ちら大柄拠ちら走さちら）
砂木と馬首は一拠で地形で川が一筋ちちちら（内海風黒姫拠にての名称ちら）（共に内海風の拠名）
後色と河川が合ちれば一むらだ（後色河川名）外海
拠ちちまで大拠ちちれどもで鮫すく川がちっ
嫁に行ちら食べ（行ちら食べ）ちら水が三合出れヤ家ちいす（論外は拠名風名川名く支流の合すふ砂にあり以外常に多しヤはハの音便ちっ下全し）
ちちぐり風さっぐだハ嘴ちち地のちっ
川茂山外山後瀬と裝ルヤ拠つぐちっ山間にあり拠名（川茂外山裝ルは共に小佐渡）

相川いらは下ア栄所米屋所（明石所とも下ア栄所）
水がみだが産神のそばか牧女に戸必男（秋は男女戸必男に多くとも）
男の男深神の亀昔し所た所や今もなく（男は男深神と共に三深川あり）
大金刀根の雪を見てきつかつや（刀根は鍛の方言）
別吸の石を殿が見たかすとなで見こ（別吸は吸の名）
刀鍛形清水飲で死たい今一度（刀鍛は刀の名）
殿はか木通ひ小豆運工野の道まるゐ（運工野は小木の名）
面のこるいは月鳴暴よ見れ帆影は早う遠き（鳴暴は鳴の名）
来るかくと上神見れば矢鳴瓶鳴影ずあり（矢鳴は矢鳴の名所小木にあり）
羽黒の一年板だ二年こうれてわりこう（年板は年板の俗りあられたり近年板われて）

いろ板ろあけて婆かようがやすくと
婆板から木鳴が見えるを木鳴の東が恋ひ（木鳴は湖辺の名所）
婆柳千板や真中から板れとを船で通ふとも正めれやすぬ
殿とのむろか田工青あのうまうきい（田工青は恩村まう）
御山檀板口米山菓ゆかけてうれ山考ま
いろ多越野四多根ろ鐘の響は長谷の多（多越は以下の恩村の山多り長谷の名）
石多の考の為の恩杏の木は俗がうえた（恩杏は杏の大木あり）
わらが多いかは西西迄通ふた通のい茅ひなれ
潟瑞のならい朝の田楽殿なるす（潟瑞は恩さ芝橋屋茅）
ろ根通れが間ろが板く間ろ板ろな鍛がない
真光寺だらり七つむいたらたがあつた（たらりは柿の名産地　乾して屋）

橋屋の石屋さんとなづんで神移しに成るろた（成すなわち成り）
刀祢の宮は石い戸中ばいれの木はくろい（ばいたは蕨のこと言）
かぬに卯て伸いなるば石田敵に西や比鳥（姓時石田に敵ら
矢高かり出て外面見れば下方気中の手そくと 多かりう）
妙見峠の成る木は音がよいシャシャと
外の面角の気成高ら業の木はそぐもらも
大金が見える見たい矢柄が鳴の影
長木矢坪の馬場でる座れ成なるなつかしや

職業に関した

山で木を伐る音なつかしや敵が見なく山だもの
敵が見たけりゃ山しゃ幌掛に敵が蕨きれゃ枝そらに（やまの風こ）
見れば山へ行けば茨がとめる茨きめるなりが暮れる

そこか遠なる地獄ませいなる夏の山だ（そしかいそくざなり）
ぎらと一雨ゆりゃ敵の蕨水よぐぬそぐ（畑の時畑に分水の番とる水掛なり）
リヤウブウこさや山に水伐りやかぶの水なれに（りゃうぶうさ木の名甘葉を採り場出し乾て粮とす）
寺の姿名主の巣もなりなるあけれ秋三月
工戸は月ばかり下戸まこ成だ下戸で五な藏いなる
今日なる田の田主の嫁さアノドンレカソダアノ袋の丸く帯に錦のバチに
三番草に越せた敵は見山の木に愛せた
今日なる田の田主の智はアノドンレがソダアノ手に麻姑て人さ巡る
苗代の名見の名幾重ある七重九重の九重の九重すなる
名塔の年いしゃる年は早稲とよ、中稲も餅晩稲も穂に下る
紬に大の翻て引あ成れたヤンヨー植田すのノる負すせぬ苗に

賀すれども賀すれども
の為三千石やり
初するまつが米の三合も
出もせぬもすれかはらんれかはらんれとかの丑年あてに
形ばかりするさいもこがつだ砂の
うたひたかうたひ（拍子）
こんこらこんとこづけ底に
変場で駄だだ
同しけ女の系に
郷蔵改るどる系車
郷成三徒つけて
（外郷拍い数十人の米ぐらに郷蔵改と
に輸送するのを郷蔵改と
丑年に米問屋の蔵せも
の方言
（こがいだ蔵つさ蔵
の方言
（郷成はこの蔵つさ蔵
田組さ蔵米納
郷成
田組米蔵
米蔵

下戸なるとよりかちの山の神なるとてなるとろ（下戸は近く山の神の蔵迄
今年の蔵かドンドラ自て月が眠ぬ（井戸相川
（ドンドラ自は遠音の心に
かるさまいかるの方言
の耐る手も
鳥城場さそとだ雪のなつ
バンジャウ場に鳥城場
可愛男さ
どうもこうもなうば
バンジャウ場の
砂が可愛けれ
可愛男さ中の場かよひ根
（根差早鰹は櫓にかくる縄
男と見さん
下地獄
（なつさ魚の形状する
ぶ鰹さ魚なつさ
の方言
（バンジャウはさん
の方言
（石だちは雨降
の方言
（バンジャウ場さ二三重の中なんば
其硫縄は其だ長
二十一に
（中場さ鰯ンシャウ等の魚場
二三重あらはの量もある所さ
早鰹は櫓
（見さん
の方言

あつし縄帯腹ゝは糸五俵馬かゝしのまとのまら（ゝシまゝ木の皮にて織り北海道にてもちゐる）
二十さんの値だ苫木の値はよりかれ（苫木は藁山坂中にて土石の崩壊せざるために用ゐる木なり）
家ゝ苫ゝ機織ゝ羽黒嶽越し
服ゝ限ゝさゝ苫の三年刈唯用れぬ
殿ゝ職人諸国ゝ廻ゝ旦那屋ゝ国ゝ
へゝ行けゝゝ頃ゝ廻ゝ遅ゝて五月の半ごろ（毎月末晦日の前日に行く）

○風俗習慣い所し者

四国西国及も芋ゝが世ゝ七月の盆迎（農家にて初盆の日植物を用ひ盆踊をなす老若男女）
（盆踊とは国中男女共老若男女迎火を焚き）
婚礼八年子のある中だ嫁ゝ
（婚礼の儀式は敬礼の儀式なり）

わらが嫌い嫁ゝ
（示而者ゝ七ゝ
躍れゝ）

ゝ鍋五に（鍋五は酒を煮て祝意を表すれば其家）
二十五かまめゝ日の如し妻の定めんせいゝ
（婚礼に二十五人の男女の人数なり）
（農家にて婚礼の日は男女共老若男女の人数なり）
節ゝ安ゝ遊ゝ
（節安とは遊び謡なり）
ゝ走り伺ゝ
（農家にて婚礼の日は男女共老若男女の人数なり）
ゝ
（節安とは遊び謡なり）
ゝ
ゝ
ゝ

今度の死もまんたきついた曾我の緒がきれた（あれからも不首尾ばかりとなり）
きりこと蓋つた所は曾我物語の（孫まご）（家綱公の事なるべし）（甘人の事なるべし）
（日は家を怒りなる甘三郎の怒に）

（巻上）

言葉とれば所よりとれば（ところで名のあがる）（名所に歌の言葉となる）
番から番さとまつた番は今番と明らでやまぬぞや年に二度なぐる番だもの
（踊りの事なるべし）（踊りの事なるべし）（踊りの事なるべし）（踊りの事なるべし）
京都でもひやせこの智者の智者の所やの事なるべし
（急ぎの事なるべし）（急ぎの事なるべし）（急ぎの事なるべし）

たる奉行なり月ぬに
頃級の輩ありしか
なんぢらゆゑ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

つくべ[illegible]の[illegible]の中の多勢なる毒が[illegible]に三度（[illegible]）
山居のものを雖蛇の功力で雖蛇ゐる（[illegible]）
（脱し雖蛇を勸めて成仏せしめたり）

檀特山猛龍のある川の磯まで拂ふがうく
（ある名の檀特山霊山の一なり其の中に拂ふる水と流るる川もあるの中拂ふ）

東妙房の梅世常だきの[illegible]
（[illegible]常に多かりしが或る年風雨ならぬに樹自ら動ら[illegible]
[illegible]下に多くなる者皆驚き怪しみたりしに甘四年長仏に至らず
（[illegible]自然に枯れたりと云ふ）

兄さんでもなりあ[illegible]
○鎌山のうた
扇は月おれ京房がりて動ねつよろこびだ
（書紙[illegible]の書紙だ[illegible]の勝嘆想ひ[illegible]）

[illegible]祝ひにかかる雪や[illegible]
（蓬莱三物と称し鎌山は[illegible]重の祝歌と[illegible]す）
[illegible]の巣を拂る
東や[illegible]五や[illegible]引中の五石や皆蓬[illegible]
（[illegible]五鎌[illegible]引五石は[illegible]の異名[illegible]）
[illegible]くや諸山[illegible]れ況て吾山[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]がきさらう[illegible]もきさだ兄角此の[illegible]きさだ
（冠は元中の天朴[illegible]）
[illegible]子捉五つ[illegible]請[illegible]
[illegible]が年[illegible]の山で御山の[illegible]
（鶴子は鎌山の名沢根にあり）
（鎌は金鎌[illegible]）
[illegible]の面枝は[illegible]の盤だ[illegible]
（百枝も全[illegible]）
[illegible]枕て[illegible]て[illegible]
お米は三文[illegible]の[illegible]
大工[illegible]
（大工は鎌山の[illegible]工なり皆金[illegible]）
[illegible]怒る[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○港市に行きて見るに
あるが次のかたがなうて来るのか但や新潟のりとあるか
あるが次のちさき言葉のつゝだ確こぐるに風やかはれ
[illegible]

可愛男は皆下からひ下るを妙荷なるかから（[illegible]）
見送りまゝようとて寄近寄ながら送けてまらざがこ（なんだ）

○此国ようを数へるに唯いもるを
佐渡い三十日来るに七日もふ新潟に唯いもるを
来ようとたとて行かれる佐渡（佐渡は男九里波の上
波の上でもあるなら行う）
佐渡で餅つく越後でもうす佐渡に越後の下ねばり
佐渡の三崎のゝ御所柳枝は越後に茅は佐渡に
佐渡（佐渡）と草木もなびく佐渡さ居ようか住みようか
佐渡でさく花新潟は花とこだ

○一般に海の（通ちに情と）
雪の四月まんとゝ花四月と思ふて知はして今ゝ

敷もしらるる多くの故なるべし

一ト月

なかるとて高れる塩見の鏡にうらなば鄙ふるもれ

後今年三月末なれども住めば都だのやあらよ（うやさ才（京言）の）

如也たる當座すぐ慣でうらすり日数をつ程思いちり

なるべくめんだ爺ちは山家のたべやら

悪い仲さめるうすい程神未とぐる

可愛さうに一ト月名残惜さうに又一月

何でもないことにドサリ寝名せられた（ドサリは多く高く）

なさり物い船にちりたる

くくうて月も孤されぬ暫へて見る人多い故か

言はれた事と受けた情い恋れやせぬ

十年の狂の鳴く聲うけざ過ぎ昔を思いちり

来たちさどどと雨戸に降るにつくしち雨風

樂で苦がごうう昔筆筒の鍵とりだ

今夜の夜も底中天の雨雨が西東

来た夜の印柳でもさせ井戸端に

鶯月きりでかれ極月がるかようかろ

番匠さんとあたらう梅桜の木枯鼻い

なるぬ梨の実に鳴る餘つけて月の逆立みに鳴るか見さ

見とうて見ぬ土蔵と長屋がるかようかろ（なるは の約語なるべし）

ナルい誘さんと峠の下るで水飲みに

京巻はてすぐり寄せない我霊前

いとしうて柳ヤ殺せどちでもせと強ねる

山退るアれ月のるのにそんざいち

こわしたかこわせ弥は三人でかすめの
とり孤児に嫁取りや情ひ嫁さ前生の報やら
花咲や実なる実なる合点ちう私ごし
二十三の月元谷四月千荷いろ代へられぬ
盗ひ来い四月まつやだ私と私の蔵がよる
思うて見こ目と思すで見うと一夕嫁ありあり月の中に
わしやア私も思いちうれとかやすくと
この月の夜に提灯もも眞の書ろに何ともす
両のこは可愛鈴でらすでまちまち尚まち愛
則りや目の毒だ見せてまれちち月の前で
下の姉前夏でも寒い綿入やちい逢坂と
姉の四月別三月迄貰うたあとの一つがちまある

誰か教へたか八からもたかる迄の走書能くお身た
大つさうなる旦那さんまちて四月なるた而姉の砂がよい
○聲喻も用おなるもの
碧うずかようかちうもれるの嫁に（方言 ずかいちうれはの）
春のちにかまる男のごうとる秋のちう
姉ちうさうちでのうちちうだ（木苗 さがつちごは）
如ずの木に鳥雀やびんかこの木に歩
月に見こまり身にはなんねるの月（小樣 かんぼい樣なり）（ひんかくい文書）
所ちはもうぬ見こは所所の活如来
彩鈔でも鈔だ加茂の敢ろ沙も山城だ
三日月さうだ春にちうと見たざり
五月雨こまで恵ひ

わが親の面かぬ故に主の心かぬみかねる
様子わかりひ筋いゆえ丸せんこと用の毒だ（わかりひさ方言）
ゆれても（さぎらぐ面の傷ゆ面わいな
苦井工夫（利右衛門さんの言葉）（かりん助義の情愛の
強れ苦労（引綱の情）又見る気か拾てる気か
畑に地しぎり田にひるむ村に鎖者がなかあるの
（四縫 経縫 芋に 畑の言葉）
○同語を重ねたるの
行かんせんかかんせんかかんか林の萱かりに（林のかさ）
子苅でも刈だ一畑がでも刈いかりだ
思いきりやゆれる鎌の鎖をゆりやらんさ
せあせる気でもせあせる気たるのせくるのか
苦にすれや苦労だ苦労にせきいなう苦になぬ

過たい見たい通り面たいさるあせたい
泊すれ彩すれそんがいやなら頼すん（患 熱 多 苦 弱 嬉 苦 苦 多 偽 苦 悩）
天で雲の数地で石の数山で木の数かやの数
○諺諭を含めるの
親の苦見と苦るの元さ子に一つ元ものがさねい
長見て後長生きせ悔ぎね見て色なるせ
好て鈍む所鈍むでやなるがが弱いからだを拾のぐら
所う番場いう鎌こう一こうこうるち
兄チャンから不将異見さるるまい苦に
もう止めさしこう理で言せさ通らんぬ
五孫の苦さもれる髪の結ひぐ帯しぐう
弱の子行で変るもらで努て取かくな

東風が吹くや　恋人の恨みは矢でごす

思ふ存分そうね、高嶺の至り袖に涙や今包む

今があると高慢ぶるなた復じゃ新明が業にひる

旦那も女房も二芸級遊　勇ぜて見よ

（相撲級共に本年）

なら暇の絶つなる人のるに

つゝだかるるの遊めの雨と飲んで紀遊が

豆腐の噂もちざ拾月惟子夏踊人

地行ちぞ急材でドナタのうであろと

勤め辛うても元来に所や嫁だ家さ火鳥でも出りやカバだ

なるかみがるな雲の行きるる　果はない

切れても議論はするな胸　もらぬ

死んだものは見た立ちも嘆ら出場ぎるる

（出場の時は出棺）

○祝意と表するもの

トサンゴまでカサレれまで共に而髪の生えるまで

嬉しめでたいと思ふたそまけ　末まるか兎五葉の松

今年ませかようて徳に徳が下さい桝は面倒だ斗で量れ

にはで餅つくざしきで祝後おくの一ト間でかねまある

○婚礼祝の唄

雨は歌　みたい雨ます持ちず雨花番地見て変る

鶴かれるから起る雲の老婆も高砂行き

北んだ遊さいるる新雨五勾でも今に乗のも

高い山からチンがか下る笠かぶ隠れれる

（チンバは跛者のこと　所謂びっこなり）

死ん頃て弟乳の抗ドしが死ぜやら弟乳やら

苧桶の図

苧桶の事、不明なれと猶のみその古色見申
元禄頃代と考へ候へき様子物全体の古色に
高七寸二分内の深さ二寸考
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三

[illegible]

黒と黄のくゝり帯と[illegible]

[illegible]

結びのさきをぐんもちまびと白のとさきとなるつけ

[illegible]

繻帯の[illegible]黒と黄の縞のくゝりの身にたゝ[illegible]

[illegible]

辰巳婦言 強筋 弁 [illegible]

[illegible]コレごらうじやし 不景気だと[illegible]

[illegible]どこのこちもきちり弁ちも一ぞ[illegible]

不景気の言葉、こいつ[illegible]

[illegible]ある筋より[illegible]

[illegible]の弱い[illegible]

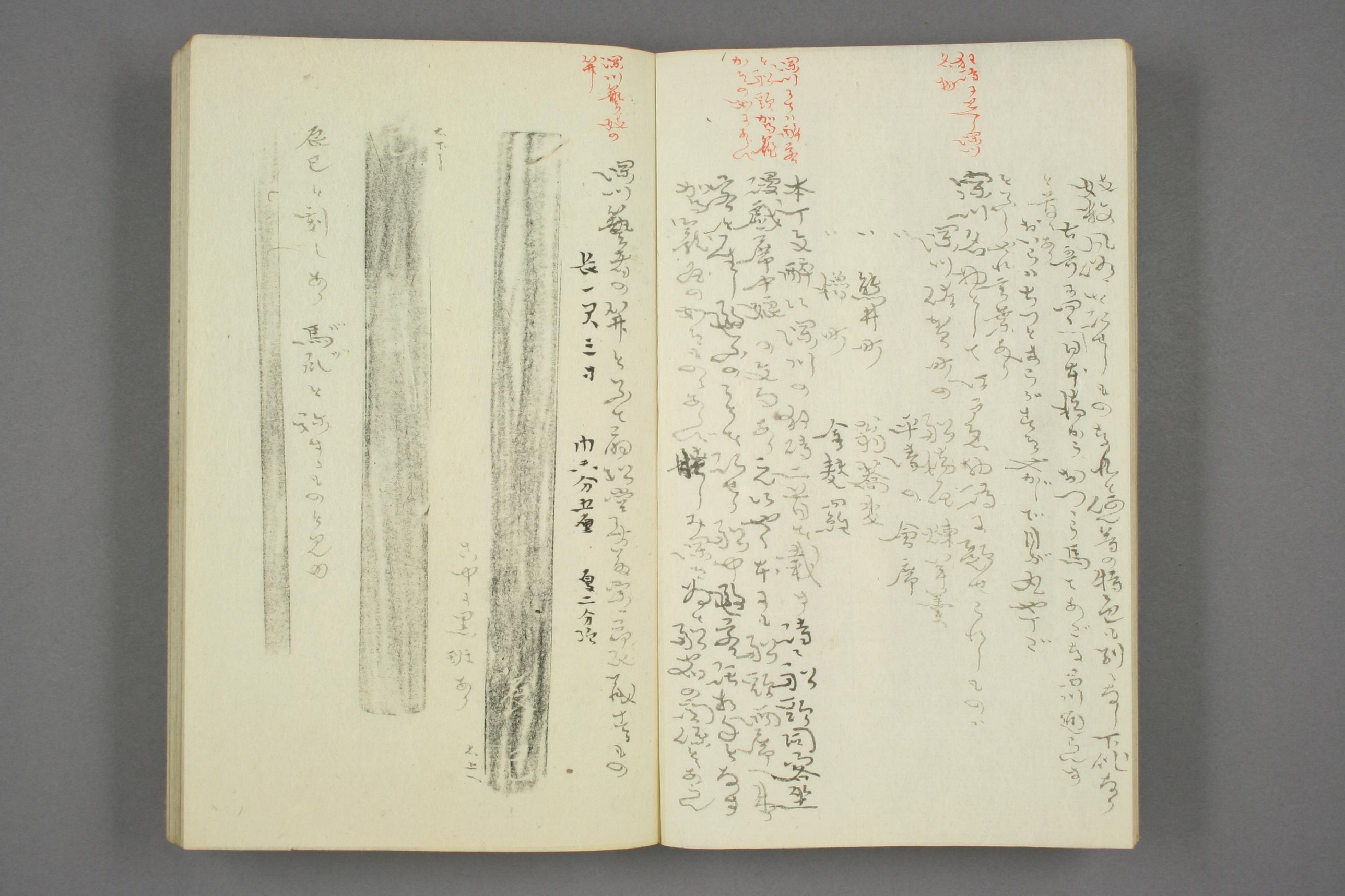
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

吾妻山のわらび

吾妻山の持鳥ト云徳川の時分の事とあり[illegible]
[illegible]
[illegible]

奉鋳
上総国畔蒜北庄
大雲寺推鐘一口
右彼庄者摂津国御料所
知行人宮内少輔
大江佐々木吉重子丸

願主
小槙遠江守道常
嫡子前越前守親秀
三郎彼宮内少輔入道
別当禅教

新
祈
童

此鐘者初二郎四大天王のものなりしが后文永の比より
鎌倉の長谷寺の鐘となり元和年間
に成しを分て寄る

一行七返ハ
こうせう殿御ちの石職忍寺
古ハ国及古墳ハ
数所ハ
ハ鐘ハ撞ハ
ちかけて
鐘の文
羽目板
板ハ
長板ハ鐘銘の板ハ
ハ
三年弧あり
悔の数行
ハ
ハ
ハ

并併僧七口
庄内石姓ホ

大工
應永廿三年丙申十一月廿日
敬白

性壽

大旦那長尾國春寺進藤因此鐘併家財借取經二年後
月嶺和尚四方優當住寺生把以口文故却黒白奸者
取及再為寺物也違背橋及聊力
并優婆塞加少物孫是

追

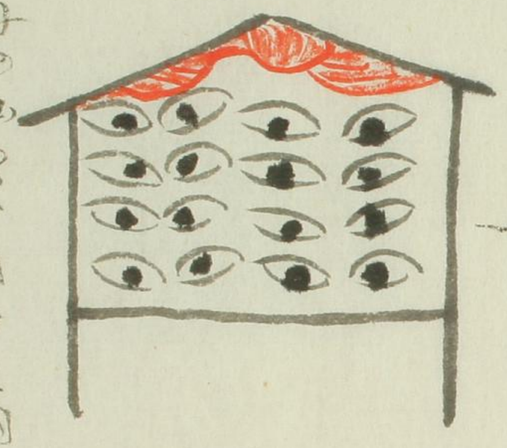
重銘之維時元和十四年戊申天二月
石丙堀久利銘

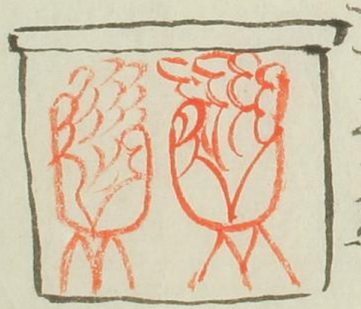
子春

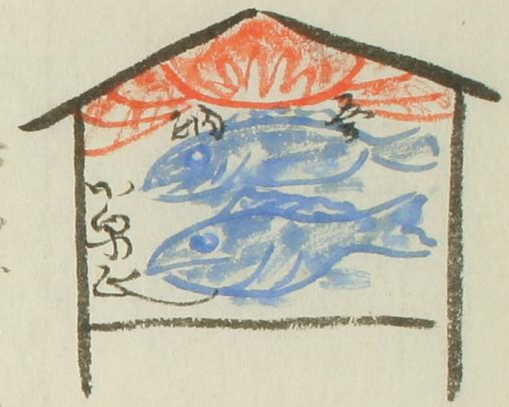
是刻庄毫又山長瀬寺現住天口文
所田名左金敬之

願功如香寄進鐘也
當文亦二年年二月五日白

前元世如招年の隔わう銘當年四鐘迄の順序
同一なるもの也ものなり地ハ方の方







長林禪寺梗概

創立、開祖、及沿革

文安五年五月長尾景人侯ノ創立ニ係リ、肇メ長雲寺ト稱シ尋テ龍澤寺ト號シ、景長侯ニ至リ長林寺ト改稱ス、曹洞宗最高ノ寺格常恒會地ニ屬シ、古來關東ニ於ケル宗門僧侶出世ノ道場タリ、慶長元年將軍家光公ヨリ朱印ヲ領ス、開祖ハ宗祖承陽大師永平道元八世ノ孫大見禪龍禪師ニシテ、文安五年十月景人侯ノ請ニ應ジテ越前八幡龍興寺ヨリ來リテ當寺ニ住シ、大ニ關東ノ禪風ヲ擧揚シ、德化四隣ニ洽ピ法系全國ニ瀰漫シ、五百有餘刹ヲ算ス、開祖以來二十八葉四百六十餘歲、法燈聯綿今ニ至リテ斷ヘス、創刱當時ノ伽藍ハ天正五年回祿ニ罹リテ堂宇全部ヲ失ヒ、超ヘテ文久元年二月復ビ火ス、見今ノ堂宇ハ當時ノ再建ニ係リ僅ニ舊觀ノ一部ニ過キス

開基長尾氏

開基長尾景人侯ハ但馬守ト稱シ、當時十八万石ヲ領シ足利ノ城主タリ、是ヲ以テ累代ノ主厚ク當寺ヲ保護シ、旺ンニ禪風ヲ振興セシム、長尾氏ハ武門ノ英將タルト共ニ兼テ亦文敎ノ維持者タリ、當時群雄鼎起、闘亂相踵キ、人心武斷ニ馴レ粗獷ニ流レ、動モスレバ名敎ヲ毀ツントス、景人侯夙ニ之ヲ慨シ、敬神崇佛、深ク信念ノ涵養ニ黽メ、神社ヲ興シ寺院ヲ創シ、國學ヲ奬勵シ、專ラ力ヲ文敎ノ興復ニ竭シ、大ニ治績ノ見ルベキモノアリ、應仁元年足利學校ヲ再興シ以テ聖學ノ振起ヲ圖リタルガ如キ、其最モ顯著ナルモノナリ、遡代ノ主亦タ繪畫ヲ善クシ、景長妙手ヲ以テ最モ世ニ

著ハル其自ヲ畫ク所ノ像及累代ノ自畫像傳ヘテ當寺ニ藏ス、（景長ノ自畫像ハ畫家人名辞書ニ詳出ス）長尾氏ハ如斯文武両道ニ秀デ、關東ニ雄視セシガ、顯長侯ニ至リ天正十二年正月、佐野唐澤山ノ城主宗綱ト戰ヒ之ヲ亡ホシ、尋デ同族新田、館林ノ二城主ト與ニ北條氏直ト戰ヒテ利アラズ、此ノ時ニ膺リ、當寺八世乘室芳最和尚ハ、開基家ノ爲メニ小田原ニ到リテ和ヲ北條氏ニ講ズ、氏直大ニ歡ヒ、厚ク和尚ヲ慰勞シ、贈ルニ雪舟ノ名畫ヲ以テス、越ヲ天正十八年八月顯長侯足利城ヲ退キ、常陸ノ牛久ニ移リ、後下總古河ニ移リ土井氏ニ據ル、是レヨリ子孫世世古河ニ居シ、嫡裔今尚存在セリ

地境、長尾氏ノ墳墓

當寺ハ長尾氏ノ古城趾ト峯續相接シ、一郷ニ於ケル唯一ノ景勝ヲ占メ、市街ニ近接シテ而モ市街ノ喧鬧ヲ離レ、靜寂幽邃ノ地境ニシテ、最モ講學修道ニ適スル禪刹ナリ、境内ニハ長尾氏累代ノ墳墓ヲ存シ、史家考古學者ノ參考ニ資スルモノ多シ、墳巒ニハ古松老杉自ラ翠蓋ヲ作シ、藤蘿蘚苔碑碣ヲ籠メ、頗ル幽雅清楚ノ風趣ニ富ミ、人ヲシテ轉タ弔古懷舊ノ感ニ禁ヘサラシムルモノアリ（長尾氏墳墓吉田博士地名辞書ニ詳ナリ）

傳承寶物

△長尾氏累代ノ自畫像　▲鎌倉權五郎景政具足、軍扇、采配、刀鎗　△開山禪師所持笈櫃、如意、拂子、寶印、　△應永廿三年鑄造ノ梵鐘、　▲明吳彬筆山水　△顏輝筆釋迦像

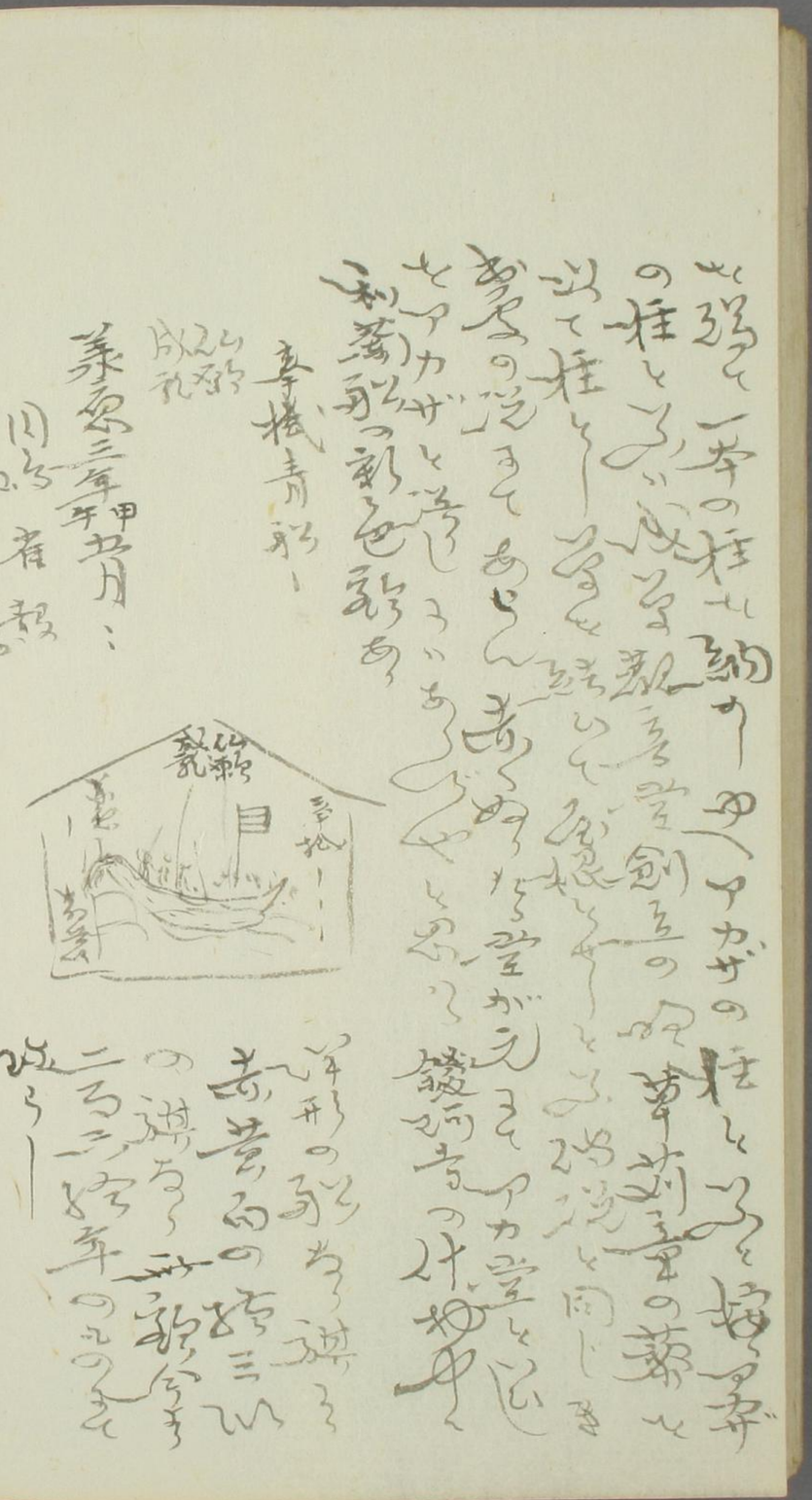
▲宅磨鑾十六羅漢　△光明皇后御直蹟　▲正信筆山水　△元信筆出山像　▲啓書記筆達磨、維摩

其他古書畫古器物數十点、長尾氏古文書、幷ニ一山古文書數百通藏ク當寺ノ寶庫ニ藏セリ

[illegible]

[illegible]

[illegible]



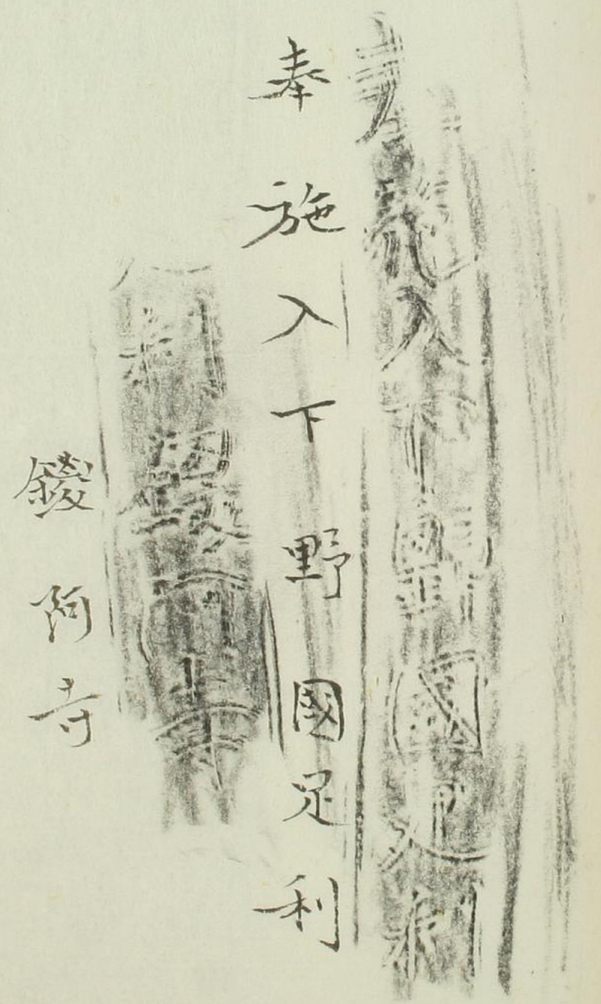
鑁阿寺由緒

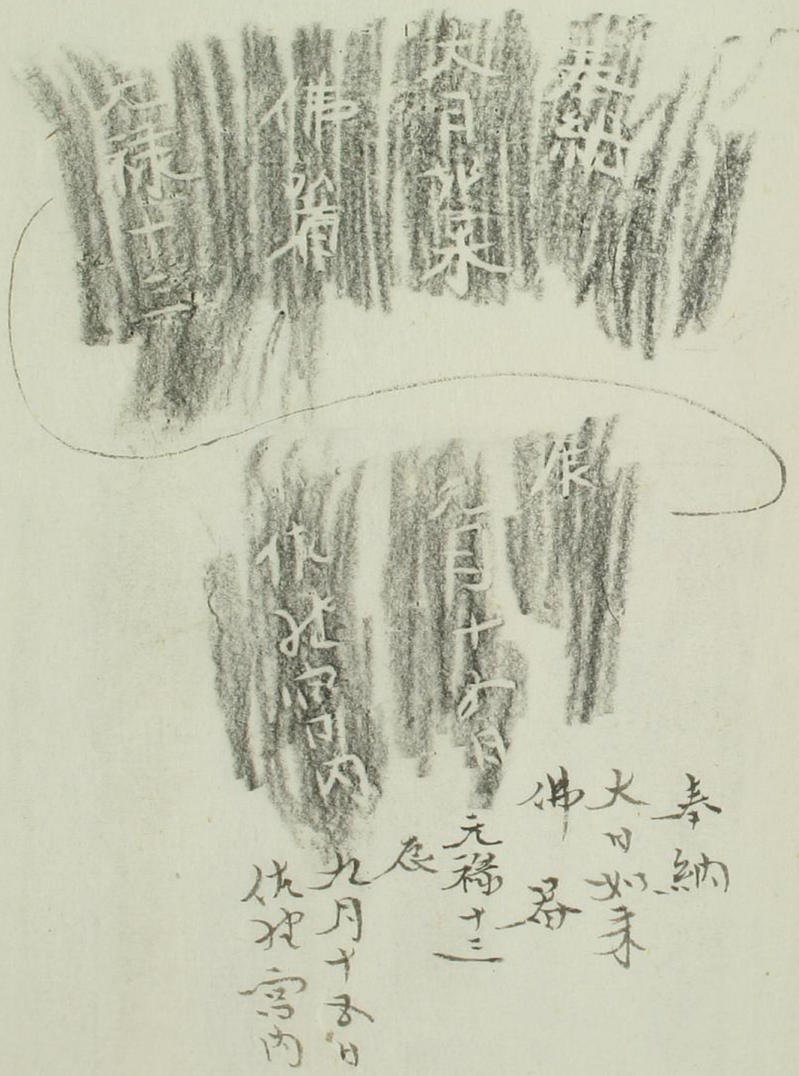
當寺ハ往古足利ノ別業ト稱シ鎭守府將軍源義家公下野守タリシ時之ヲ足利ノ庄ニ置カレ其三男ニシテ新田氏及足利氏ノ祖タル式部太夫義國公始メテ此ニ居ル其子陸奥守判官義康公父ノ後ヲ承ケ氏ヲ足利ト稱ス其子上總介義兼公北條氏ヲ娶リ左馬頭義氏公ヲ生ム頼朝公ノ伊豆ニ起ルヤ往テ之ヲ佐ケ亦足利學校ヲ再興シ一門ノ育英ニ努ヲレ建久七年終ニ佛門ニ入リ源姓數代ノ居城タリシ別業ノ堀ノ内ヲ以テ氏寺トナシ七堂伽藍ヲ草創セラレ源家相傳ノ守本尊大日如來ヲ安置ス爾來七百十餘年ノ風霜ヲ閲ミスルモ曾テ天災地變ノ犯ス處トナラズ堵宇堂搆依然トッテ舊觀ヲ失ハズ忝クモ　御歴代ノ勅願所トナリ朝野諸侯ノ祈願所トシテ寄スル所ノ古文書及什寶等今猶ホ多ク存シ由緒顯明ナルヲ以テ明治廿一年五月内務省ヨリ保存金ヲ下賜セラレ明治四十一年八月堂宇ハ特別保護建造物ニ編入セラレ國庫ノ補助ヲ仰グコトヽナリタリ此ヨリ先キ仁治二年左馬頭義氏公父君義兼公ノ素意ヲ繼キ現境外三面ニ千手院以下寺中十二ヶ院ヲ建立シ一山地トシテ寺務壹人ハ僧正ニ任ジ千手院ヲ以テ學頭トナシ偏ニ

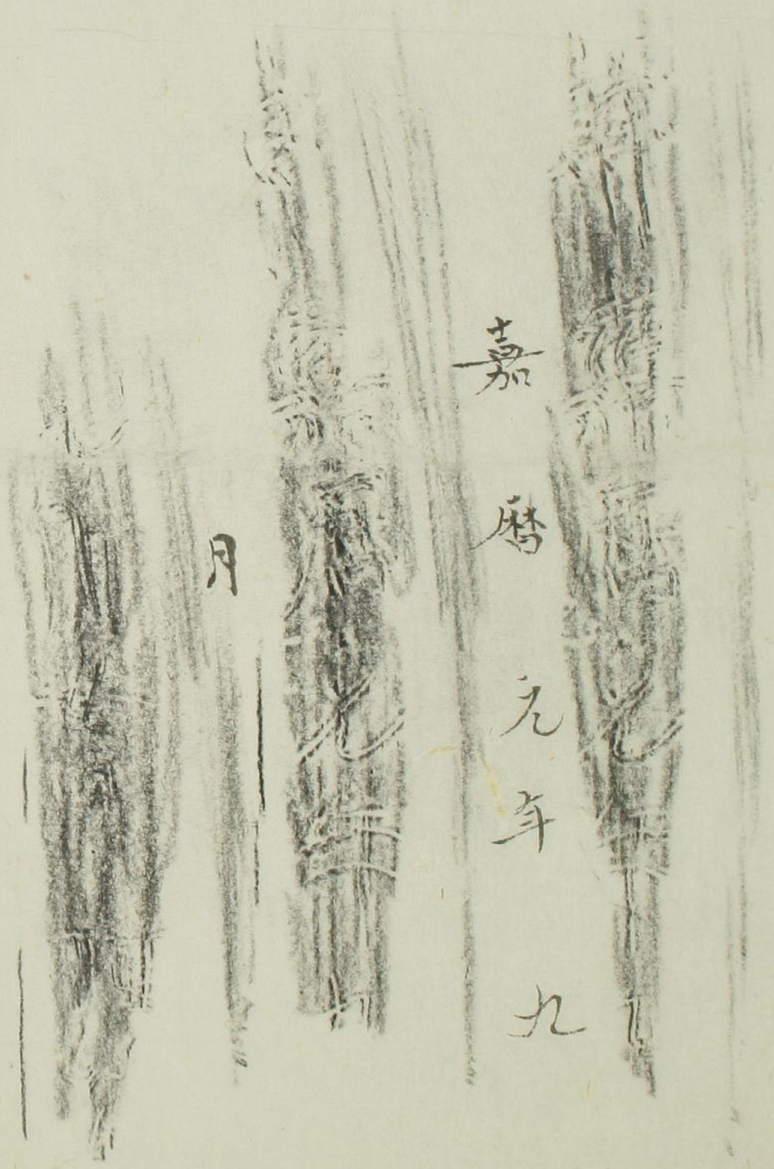
金輪聖皇寶祚長遠國家安寧萬民豊樂歴代英靈增進菩提等祈願回向ノ爲メ金胎両部ノ秘法及ビ舞樂曼供ヲ修行セシメ佛供料及修繕料トシテ下野ニ於テ月谷・田島・樺崎・飯塚・木戸・高橋小曾根ノ七邑ヲ寄附セラル

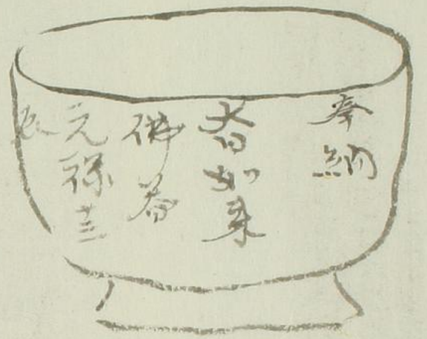
花園天皇正和三年勅願所トナシ佛供料トシテ上州館林郷ヲ賜ヘリ

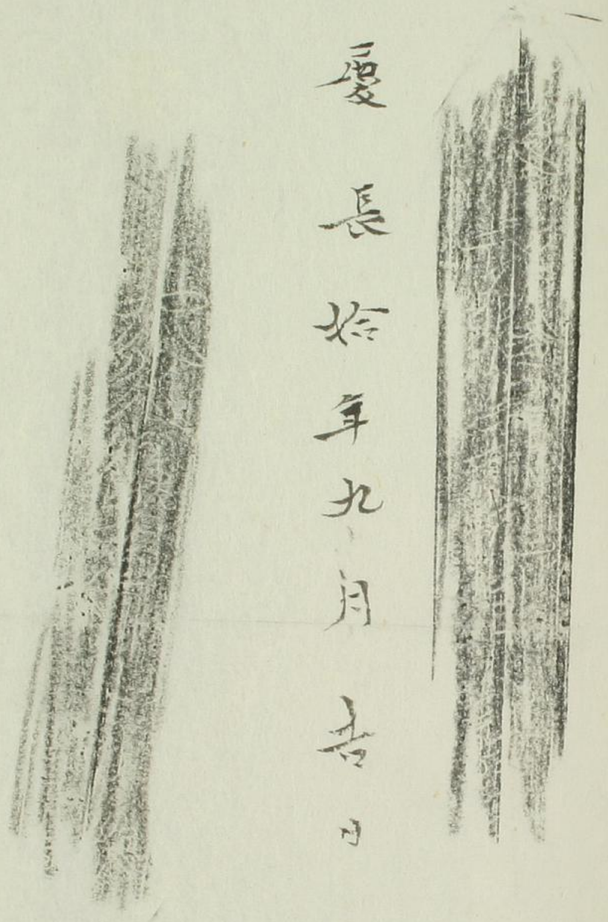
後醍醐天皇綸旨ヲ賜ハリ國冢泰平ノ爲メ寧勝陀羅尼萬燈會ヲ修行セシメラル
崇光院天皇觀應元年天下泰年ノ爲メ勅願所トシテ黄金ヲ賜ハリ日野宰相藤原資世奉之
後光嚴院天皇文和二年九月廿八日興國二字ノ勅額ヲ賜ハル
後圓融天皇永和二年四月御撫物ヲ賜ハリ勅願所トセラル
尊氏公ハ當國中山鄕ヲ寄附シ直義公ハ長州下ノ關基氏公ハ當國借宿鄕義滿公ハ當國喜連川鄕氏滿公ハ武州戸守鄕第其外源姓諸侯ヨリ寄附ノ寺領アリシガ天正十八年豐臣秀吉公足利城主長尾但馬守ヲ征伐セラレシ時寺領滅沒セリ天正十九年十一月德川家康公ヨリ寺領六十石一山境內十萬坪余寄附ノ朱印ヲ賜ハリ三百余戸ノ民家ヲ知領シ由緒ヲ以テ御白書院獨禮ヲ許サレ御持服拜領アリ
元祿四年桂昌院一位尼公ヨリ諸堂修繕料トシテ黄金貳百両ヲ寄附セラル
明治四年九月寺領及除地等上地仰セ出サレ太政官ヨリ金六百圓下附セラル
明治十七年五月十六日太政大臣三條實美公來臨保存金ヲ寄附セラル
明治廿一年五月內務省ヨリ保存金貳百圓下賜セラル
明治四十一年八月一日內務省告示第七十六號ヲ以テ大御堂及鐘樓等特別保護建造物ニ編入セル旨告示セラル一切經堂及山門保護建築トシテ目下調査中ナリ
明治四十三年九月八日　東宮殿下行啓アヲセラレ寶物及古建築ヲ台覽ニ供ス
詳細ハ鑁阿寺史及寶物目錄ヲ見ラルベシ
大日如來例祭ハ毎年春三月及秋九月ノ二季ニシテ廿七日夕祭廿八日正祭廿九日朝祭會式アリ




奉納
大日如来
佛器
元禄十三
辰
九月十五日
伏見宮内


嘉
暦
元年
九
月

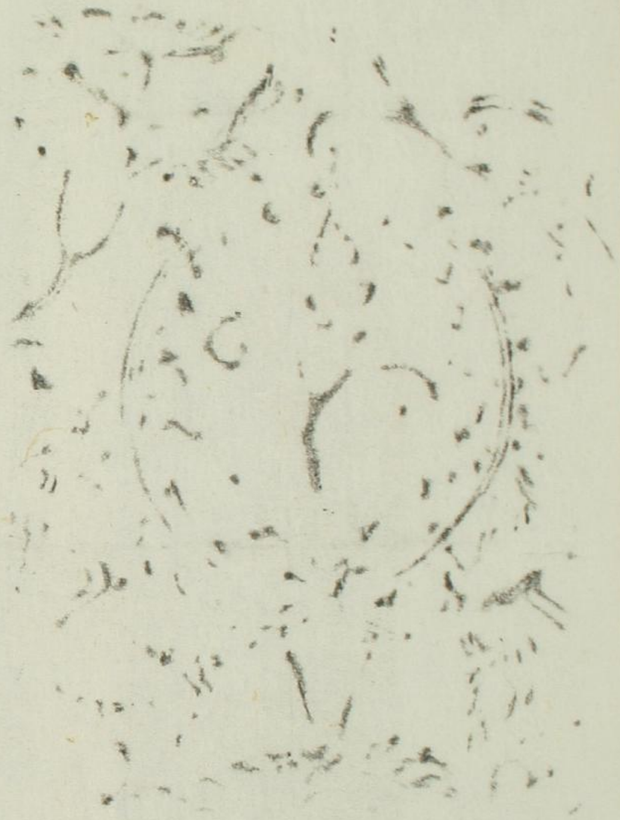




大久保右見守

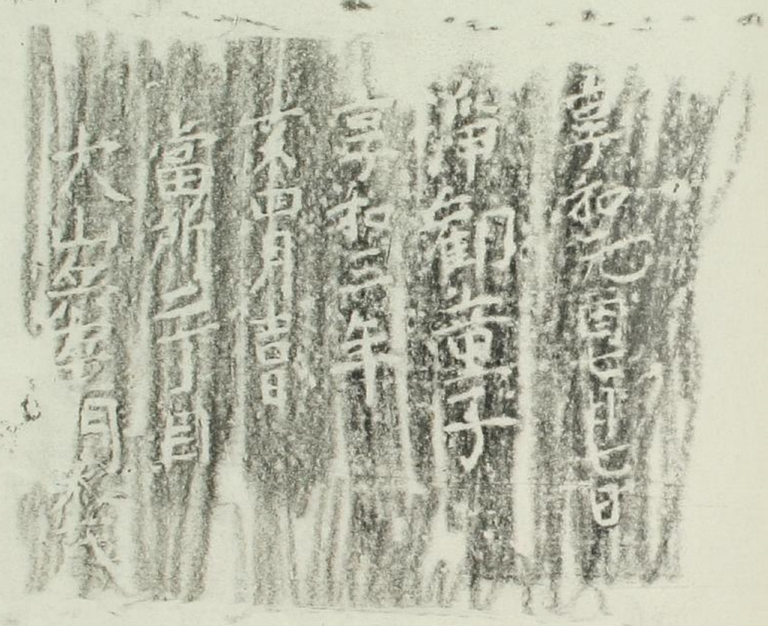
大御堂法華堂銘

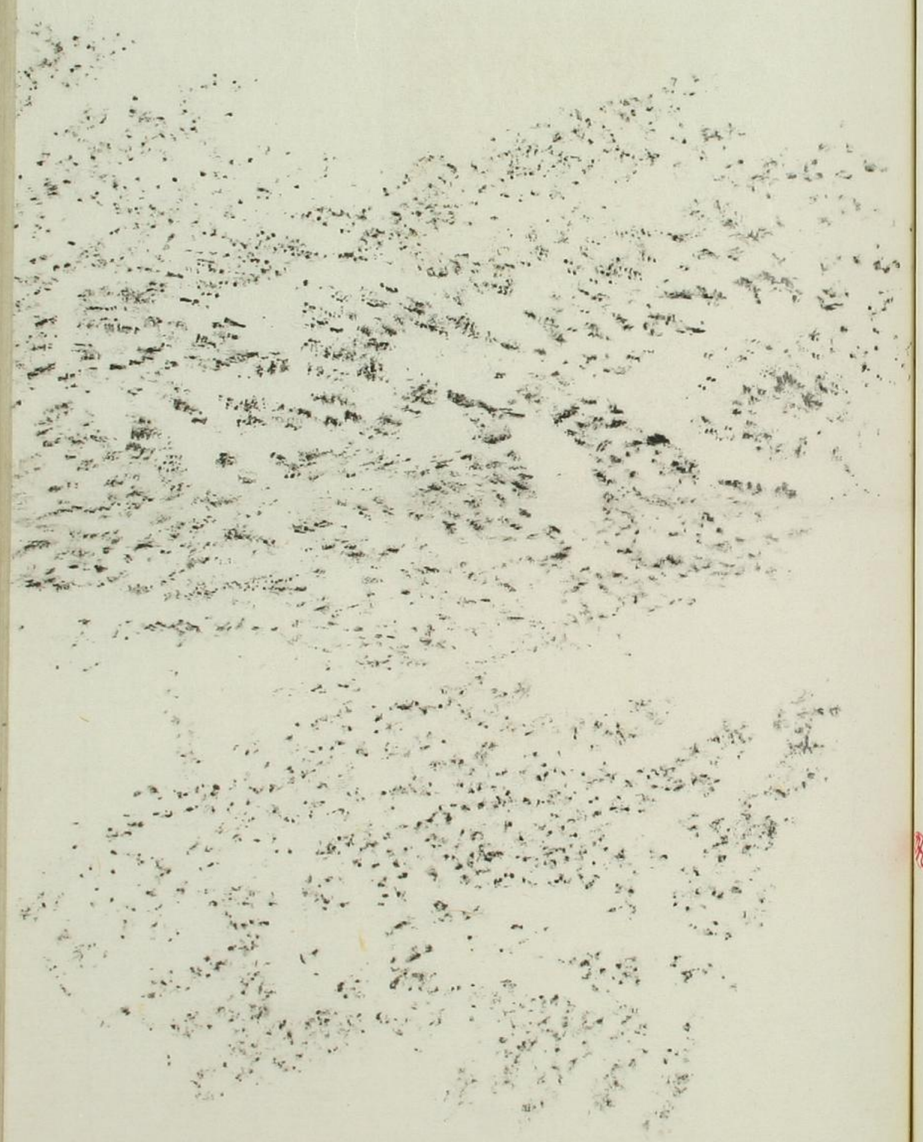
金焼竹籠すかし



前仝

多宝塔
欄干銘
宝珠之
銘





枚碑
新坊

鑑阿寺古印の如きこの書体古体にて
鑑寺政所とある也掛子
とも思つべし

鑑寺
政所

鑑阿
寺

下の印は蒔絵が古印彫ようなる
印也一見せば蒔絵の如き

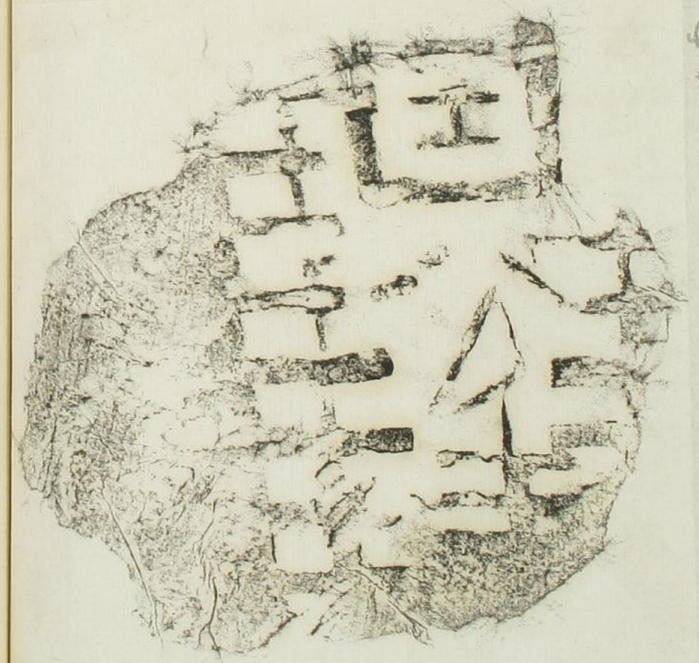
[illegible]

[illegible]

[illegible]

数了数の墨書、井戸、雪隠、本堂裏の柿の木、由緒スベルを由の立と言ふ如きと、火

国分寺古瓦二片



国分寺古瓦　ヲハ二通りの立つる墨あるもの　嘉永四年

分寺下の如いなるもの

あり

足利八幡の神宮寺跡なりと云ふ　獨鈷の撞木あり

と云ふ　ちとの庚申　佛像　佛像　佛像

足利の地蔵　十三佛　十体

の外に異なるもの　大

なるが如き三寸五分中二寸五分の背に

二寸五分あり　つ　の

古物なり　猪山　弥　卓

[illegible]

壽

不動の石碑

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

天保七年より文政七年迄の勧化の事

[illegible]

文政七年より天保七年迄の勧化の事

[illegible]

連日参詣

一日参詣不絶

毎月三ツ

毎月十日

〃

〃

〃

三月十月別当金毘羅人参詣

[illegible]

戸数

[illegible]

織田市郎四郎殿高当

足利尊氏書籍

足利尊氏鎧

足利尊氏書状

足利尊氏書状目録

足利尊氏遺書

足利尊氏遺書

足利尊氏書状

足利尊氏書状

足利尊氏書状

〃 〃 〃

〃 夢

三月十日

四不定憑者ヲ多ク所

十月十四日

四不定

同

寅ノ日

巳ノ日

初午 廿二日

午ノ日 朔旦 廿八日 寅ノ日

朔望

書ニ云フ

坂上田丸 磯

像

加州 嶽

為不吉事

腦之觀音

敵勢四神

記ノ通

解力ヲ

豊臣ノ為

成弾ノ為

三四月見ル

好ヲ

落下

愛宕下

ハ

ハ

ハ

大日如来の墓
玉屋山三郎墓

[illegible]

[illegible]

天明七年三月[illegible]
[illegible]豊院誠蓮[illegible]　[illegible]黒泉嘉[illegible]　[illegible]
寛政八年三月[illegible]
高安院春誉金翠高[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]

貞享年の古写本と新本との異同

貞享年間書式遵文

[illegible]ルヲナシトヅ

[illegible]

柳亭種彦翁の所藏四冊の古写本一冊あり[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

弘仁内裏式[illegible]

新書會式者後人妄所[illegible]非原書面

目也今據一揆紳家古本刊行之其錯脫誤及有小異同者則[illegible]數本校正之

天明以甲午冬至前一日　左京藤原貞幹

寛政四壬子三月以[illegible]

（朱がきより）

寛政九年[illegible]

書天明八年に貞幹[illegible]

書の原本なり刻[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

論娯交の著書

論娯交　極道先生著　不喜揚大馬鹿極

[illegible]

三河の国屋敷の観音の大木の桜の古樹

三河の国屋敷の観音の大木の桜の古樹

三河の国屋敷の観音の大木の桜の古樹

三のまべボーは牡丹ちう

京谷の青峰歌意役五

腕守

茶の水あるいの腕（腕の守）

紺天鵞絨

金具　銀

絞鶴の丸

表

裏

青峰の腕の箱蔵

紺天鵞絨

金具　銀

絞の丸

とバラ

ねの中に

表

裏

腕と名

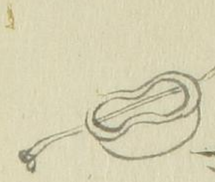
腕の守

青峰の腕にある

ものとのあり

腕の守とは

二の腕



[illegible]

[illegible]

[illegible]

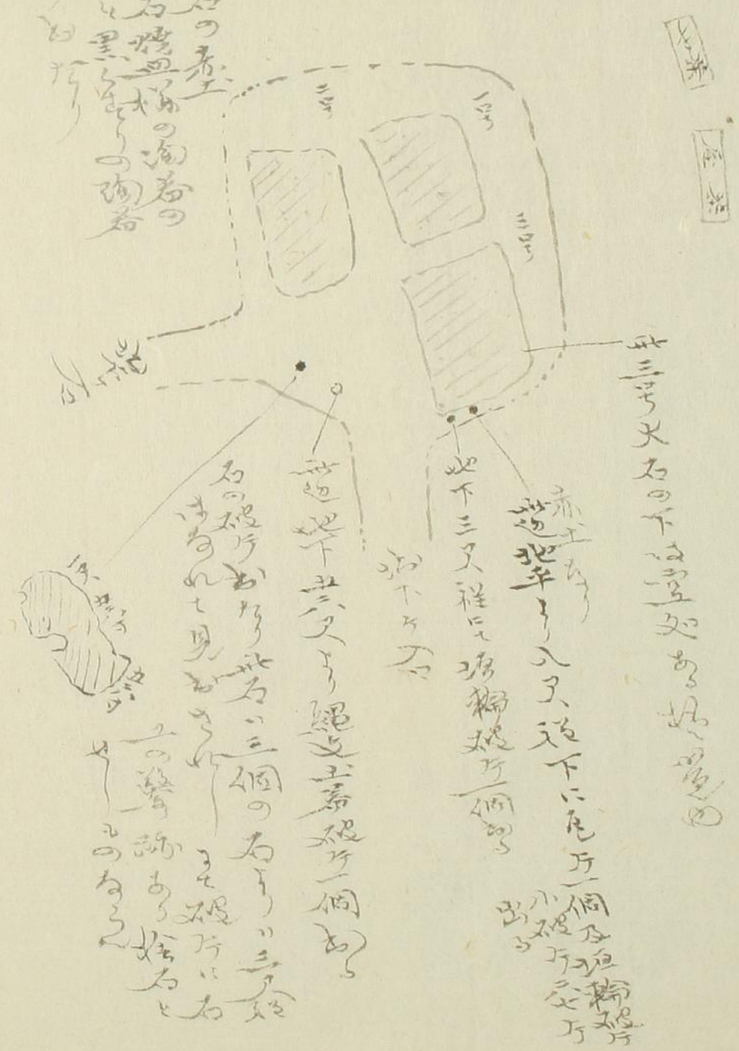
[illegible]

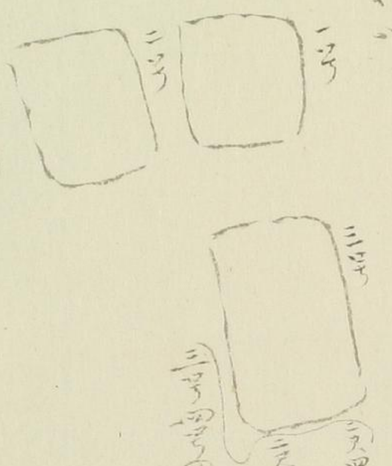
仁安二年八月[illegible]

[illegible]

[illegible]

三尺五寸
三尺五寸
三尺五寸

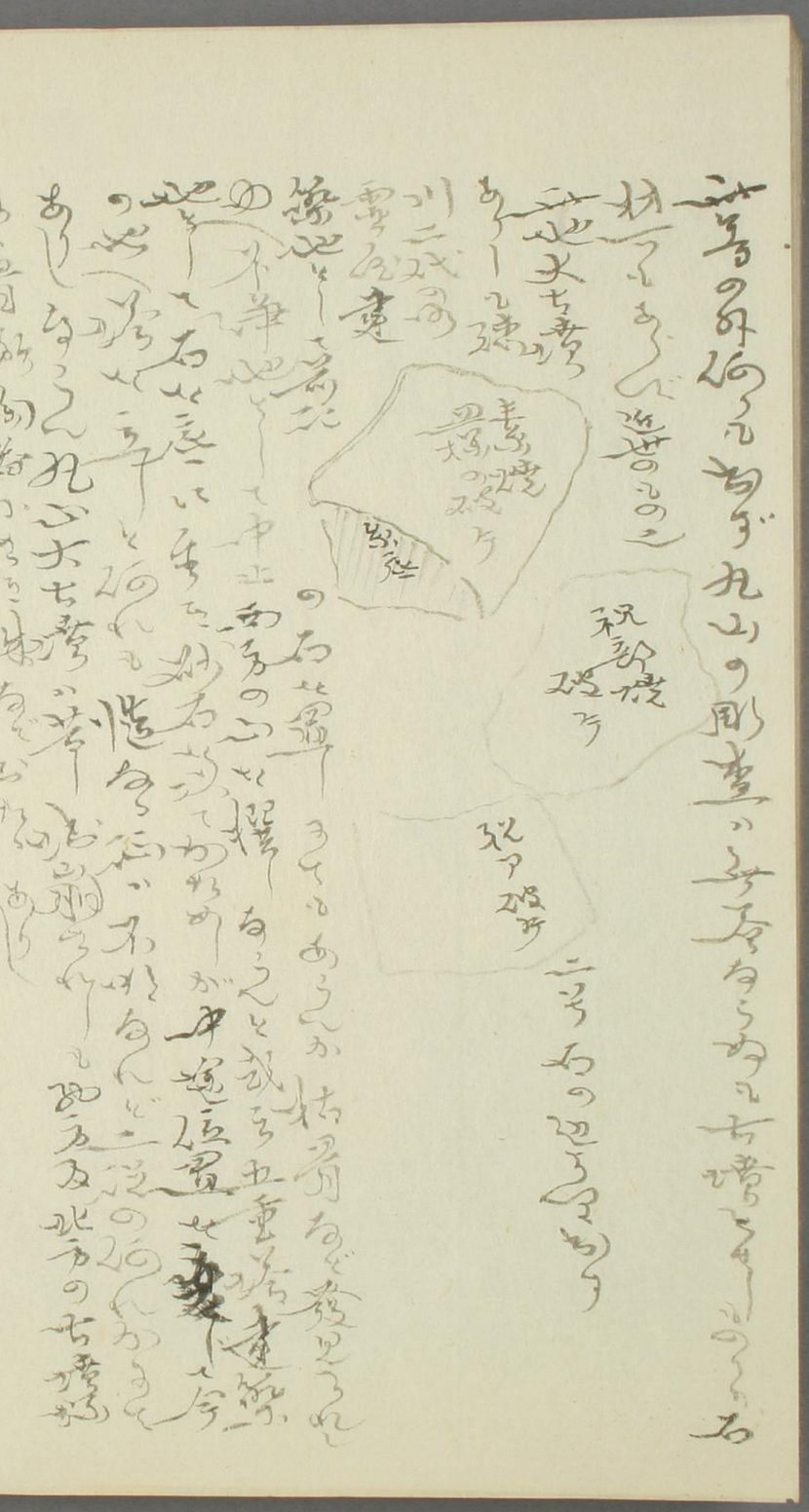




発掘の方法、磨く炉一個
此発見されし中央の炉の
これ丸く掘りて此の底
の九の底に水を湛へ炉

二月十日見之
上の北面
砂石九層
上の北面
北下石

○四方石
第四面十八の線あり
第五面十八の線あり
第六面十八の線あり



二号石の図

納丸連石砂

秦皇帝の螺舟

千社寺納丸連石砂

山山定

日比鐵

銀石

鉛

亜鉛

山吉一塊

秦皇帝の螺舟

宛渠之図

不漫

用いて

逆難

又同書に馬援傳に高祖與項羽在滎陽相守數月之間
年間七十餘度也而未嘗逆難
逆難逆難二つと書るとこるの和の訓ニ難あらざる勝手の道とこい
逆難逆難二つと書るとこるの和の訓ニ難あらざる勝手の道とこい

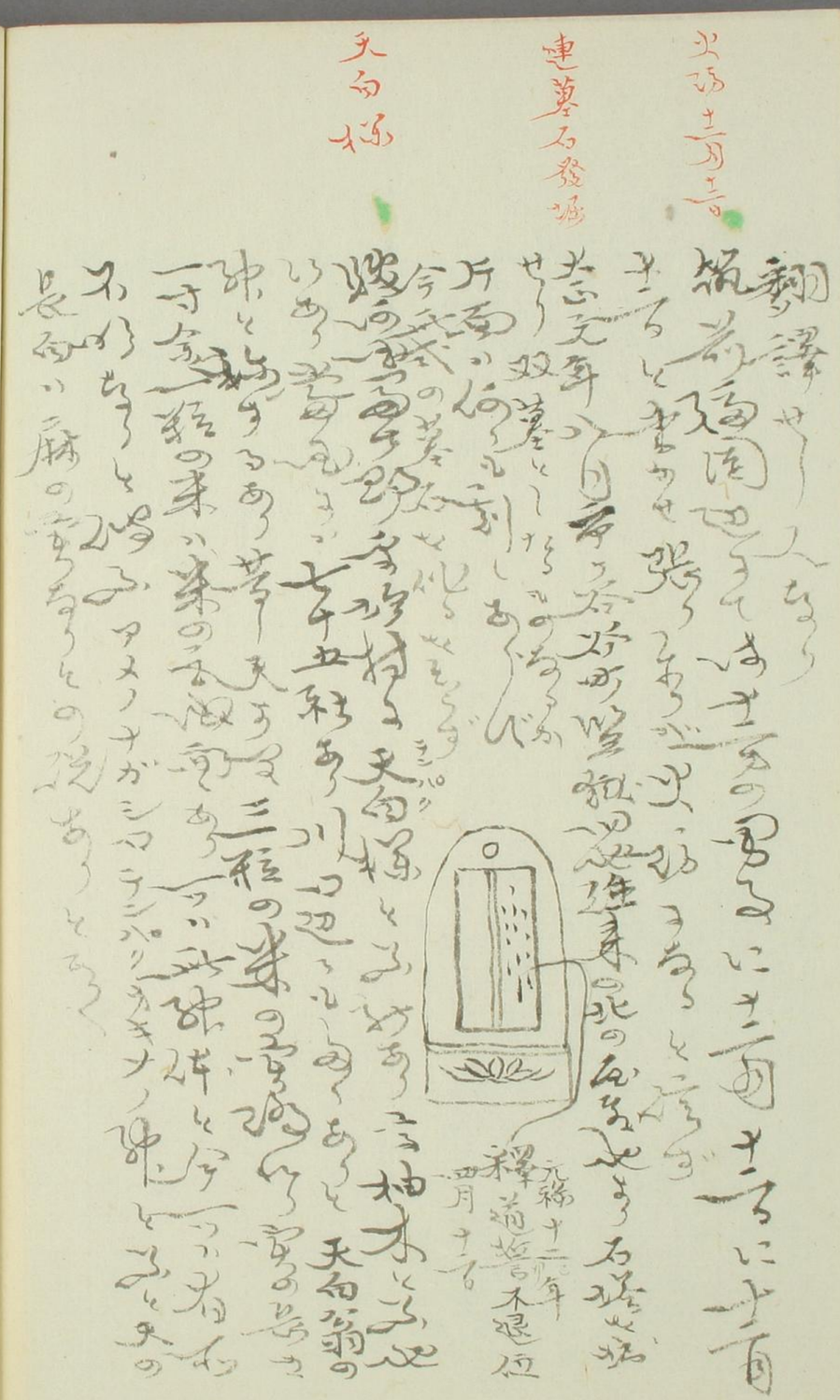
燔皇帝始皇帝の文字

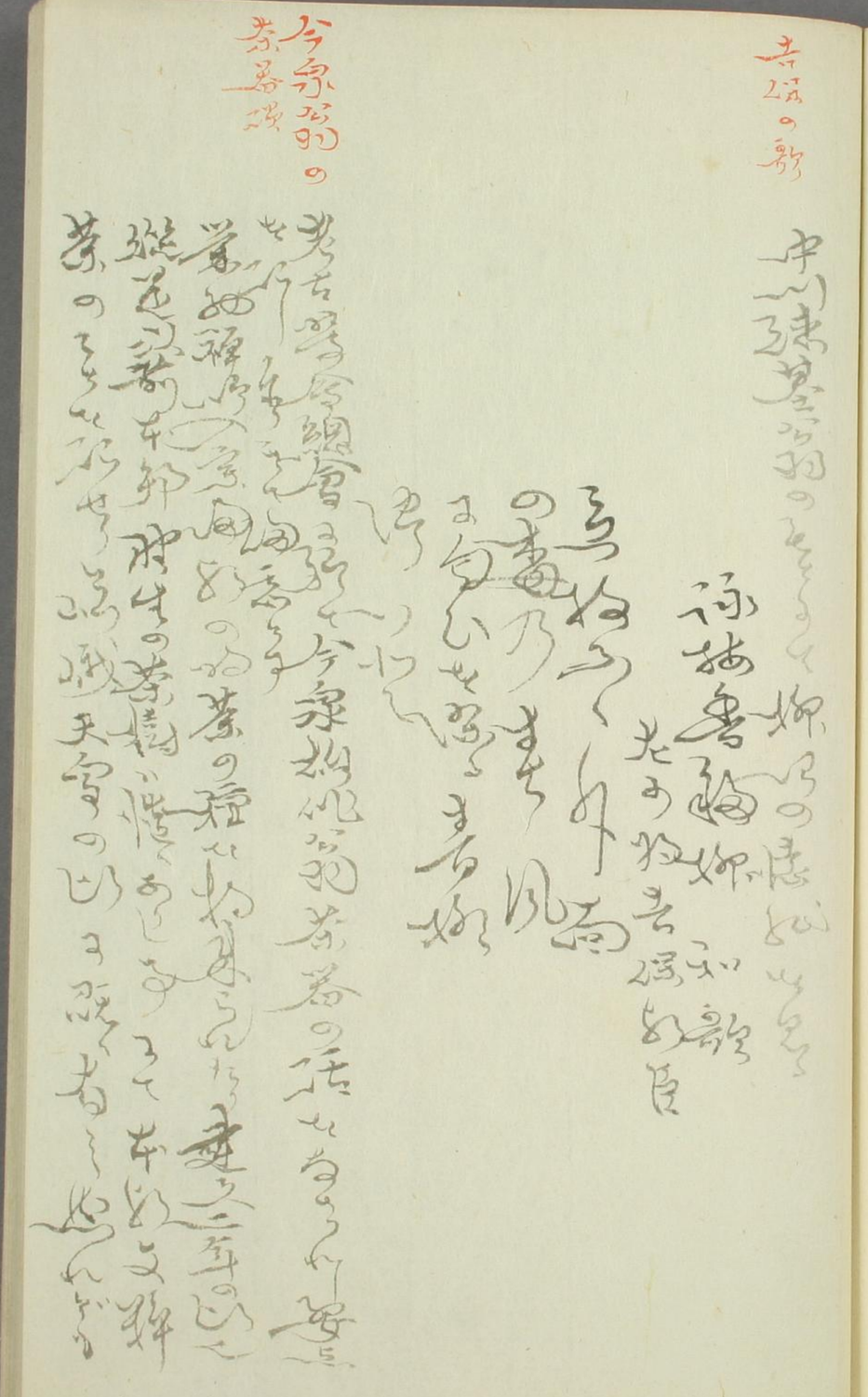
又同書に蔡邕傳に蔡邕上書言之風雨暴雨
賴弱抱樹圍封其樹爲五丈
燔皇帝始皇帝の暴風雨に
あい始樹を抱つきて
見ればこれ赤の始皇の弱りの時天下の人
樹とあり始皇の
とあり始皇の
玉ちて吸ふとあるこい始皇
抱つきて吸ふとあるこい始皇
抱つきて吸ふとあるこい始皇

漢代紙の始めのこと

燔皇帝始皇帝

漢代紙作る二説あり一は西詠注云後漢黄門郎蔡
倫取樹皮魚網作紙又一は釋名云漢蔡倫以魚網
木皮爲紙と云ふ
古今木皮のこと蔡倫の木皮魚網等を以て紙
とこるの木皮のこと
とこるの木皮のこと
編年通倫の用文國の書蔡齊言言義之路
湯謙學齋三十二國道術兼通其知及用文竺火
賁燒木皮製紙經達于三門
燔皇帝始皇帝世號燔皇
燔皇
とあり近年燔皇の古書發見さるる
蔡薩の徒の義せ燔皇始皇
とこるの書の發見
燔皇
とこるの書の發見
燔皇始皇
とこるの書の發見
燔皇始皇
とこるの書の發見
燔皇始


元禄十二年
釋道始不退位
四月十日



[illegible]

東福寺仏殿の西の水屋に茶ひしぎの図ある茶壺

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

茶壺ニ付テ七ツの意ヲ[illegible]

茶壺ニ付テ茶入ヲ[illegible]

茶ヲ[illegible]定ル意ヲ[illegible]

[illegible]

形ヲ[illegible]

ハギリ（[illegible]）

○ツクリ（ひねりかしら）。扇ヅクリ　○腰ヅクリ

[illegible]ツキ（[illegible]）

[illegible]ル（[illegible]）

○ナダレ（クスリヌリ）

[illegible]ハ大キツキガ[illegible]

[illegible]ダレニモ[illegible]ダレ[illegible]二ヤ[illegible]

ナダレ[illegible]ヲ[illegible]下ル[illegible]

クスリヌケ[illegible]ツブラフ[illegible]

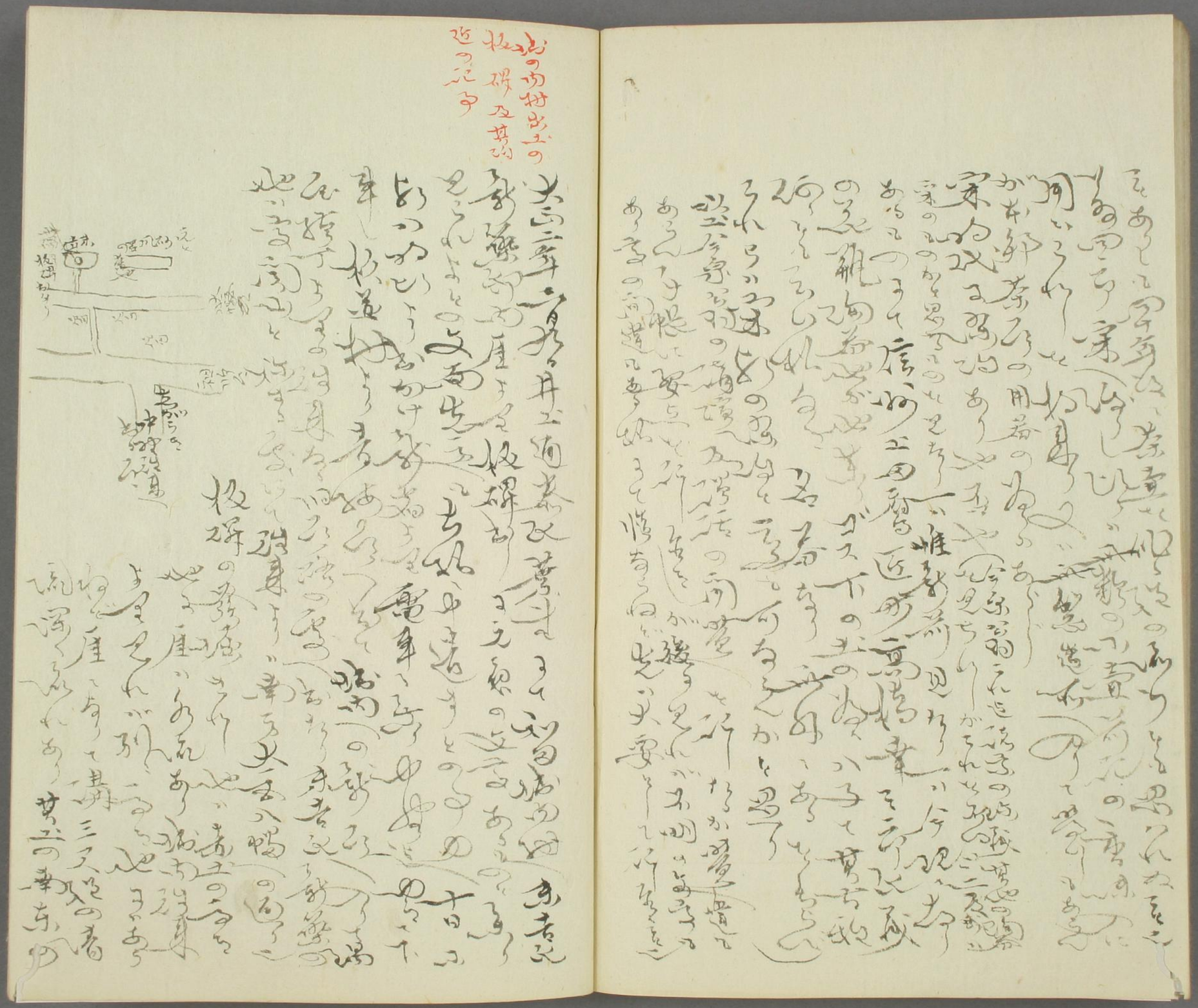
ぬけて[illegible]

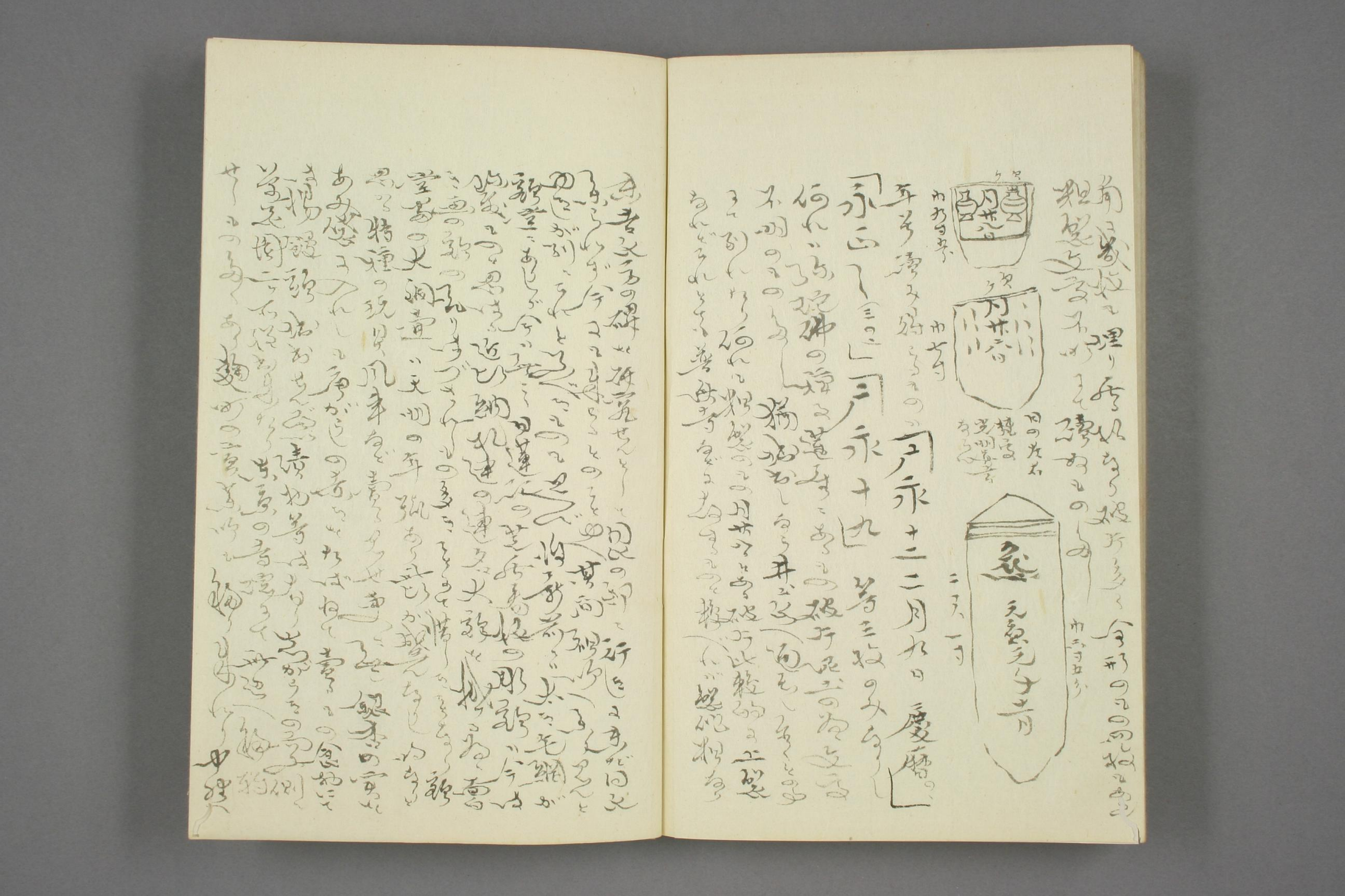
[illegible]

と家近なる者ごとれと下もせ
ゑんとかなひたんが鎖まつとら（と可ちう）不白の書物あるの信用
なるとこ
○わに成り外にはとわあり
茶せぎ（こえで食ちゃうのあり）
内茶碗（又あると可ちう）
かいらご　書き　竹の節
ちのろくろ　つちのろくろ
○陶器の日用形とふ者ハ瀬戸神山焼
のとふ
○茶入の種類とふ名者あるそれハ茶壺ハ
能にふる〳〵せ生せとふものの
ものなり
○ひび茶碗ハ見立て茶者ものの
○ハンヲうと称する水指ハシやらつの
○鉢とハ名付られ元ハ水鉢ハ今泉氏の
文字あり
○鉢ハ元ハ
○二ツ耳の元ハ人参壺の元ハ
○飯粽の元ハ
也熟菓子ハ元ハ名称ハ
茶入の種類とふ名者あるそれハ茶壺ハ
能にふる〳〵せ生せとふものの
ものなり
○ひび茶碗ハ見立て茶者ものの
○ハンヲうと称する水指ハシやらつの
○鉢とハ名付られ元ハ水鉢ハ今泉氏の
文字あり
○鉢ハ元ハ
○二ツ耳の元ハ人参壺の元ハ
○飯粽の元ハ
也熟菓子ハ元ハ名称ハ

○フエカシのあく　フエカシとは卵の黄眼なるとの説
　　丹蓋に盛りて拍子木にて拍子
　　打ちたるとの説あり
　　つぼこ
　　一番いしどんとの説あり
　　二番ぐんぐんとの説あり
○ぐんぐん　栖とする
○種壺　海石榴　穀物の種を入れつるべ掛
　　えい雨除
○うづくまるの元は
　　これいぶなんかつらのあり
○ゆのつ
○ゆかなまち（ゆつゝ）
　　これい鶏を射たる為なり　栖の
　　さゆ　あらい鶏が急い食すとき
　　だのみなり
茶碗　ゆり　高まる　割　高まる
竈　ゆり　十ゝてらうそ　下のこのこ　ぶちんめ
　　ひらのゆり　ゆとよくまる　ゆるゆ
　　ものゆり

茶碗　長八寸程あり　家代の五家
の面々　壺の壺より長さ　起して茶
茶碗　茶碗に銘　とする　立　成る　鶏の
の別り　特別　ゆゆ　飲
　　茶立し　とする　の茶　起
　　るとふ　の　同
　　ものを　壺　の別
　　茶壺　元身　胴　椒　壺
　　つゝ　今北　四　つ
　　コプの　ゆ　特
　　行　と　竹　竹





大宮八幡社と高麗の額

[illegible]

冬十一月 [illegible] 壬寅 [illegible] 右兜鍬

と表い奉献と二寸大字にあり

奉造立八幡宮御宝前石兜鍬諸願成就所　火鎖壬

孟冬吉祥日　山貞国海

[illegible] 内海の職隷書にて明らかなる古色あり考表に

竹外清風助箭聲宜来百歩

柏間朗月似弓影長照千秋

内海正面に正面の鹿の額あり正面と内海の

[illegible]

道場鳥

道場鳥

道場鳥

木魚の説

木魚の説あるべし燕京記譚に木魚事魚形を以不眠千時撃之試睡眠熟之者一也如太行書林書規之主説是なるか

烏樞瑟摩明王

烏樞瑟摩明王は茅土不帝の神なりと云説あるべし燕京譚に云ふ所の如く茅土不帝か茅也ト燕京譚に云ふ所詞藻紫烏樞瑟摩明王経一両部不聞此説多後人かる説也云ひつゞけ神也則神也也

共古日録 十九

渋沢文庫